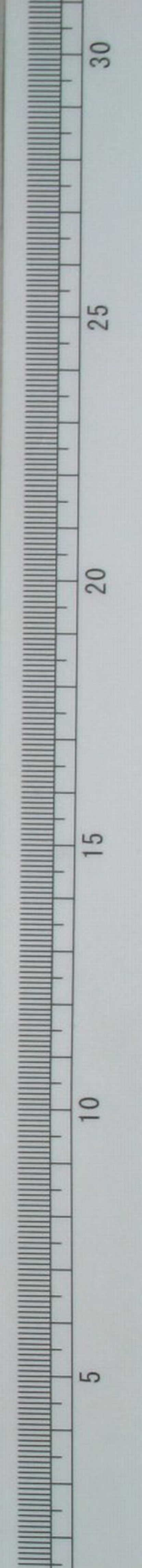


無枝齋雜錄

五

薩摩形所  
玉繩城址と伝ふ  
房の景の天狗  
かまゝとらぬぐり

特別  
14  
1919  
80





○薩摩の支所

伊集院重豪の証しによれば薩摩の支所はつらつらあ  
つらつらあめつらつらあめつらつらあめつらつらあ  
勅文化の流るる

島津家の江戸より上下するを勅文化を伝へての  
間接より十二人位はあつたといふ、下の関海峽を船  
渡しするにけむ西海山陽東海道と皆陸路を  
伝つたといふ事、さういふ事には船を船を  
送つて、下の関より内つてあつたといふ  
また船の出入りの船は、本島の諸島を一切



ひつが天保銭を二庵父と申す江戸をむかす  
と申す此の事あつたと云ひ申す此の道中の敷の  
三十者一、千二百人の多し申す此の事申す  
まゐり申す、考勤交代、徳川幕府の維持  
うら出、まゐり、大名迄の、此の事申す、  
薩摩守の命の、此の事申す、

高橋守の命の、此の事申す、  
名と申す、此の事申す、  
薩摩守の命の、此の事申す、  
を除く、此の事申す、  
斯く、此の事申す、

徳川幕府

此の事申す、此の事申す、  
此の事申す、此の事申す、  
此の事申す、此の事申す、  
此の事申す、此の事申す、

大早表の命の、此の事申す、  
即ち、此の事申す、

大早表の命の、此の事申す、  
此の事申す、此の事申す、  
此の事申す、此の事申す、  
此の事申す、此の事申す、



















まうころのすまゝをまししん所持に或階を造るに  
念しぬまゝを以て其のまゝ造る道の本も  
心も紅をまししと一投中折るとを帽を扶  
ちてもとの道と度りぬ  
えんら山田を造る十七八町  
行きてんまゝに造るに  
るに一方を不船くもさる也  
あつた山内を造るに  
春日本船の停る所を  
と申も行くとすことす  
揚木生る所を

山田

山田

知れぬ所を  
ます村を造るに  
ゆゑ玉縄飲の  
内揚木と云ふ  
おるまゝの  
して揚木  
つ村を造るに  
の所を  
ぬらぬ  
るに  
揚木を造るに  
揚木を造るに

山田

山田

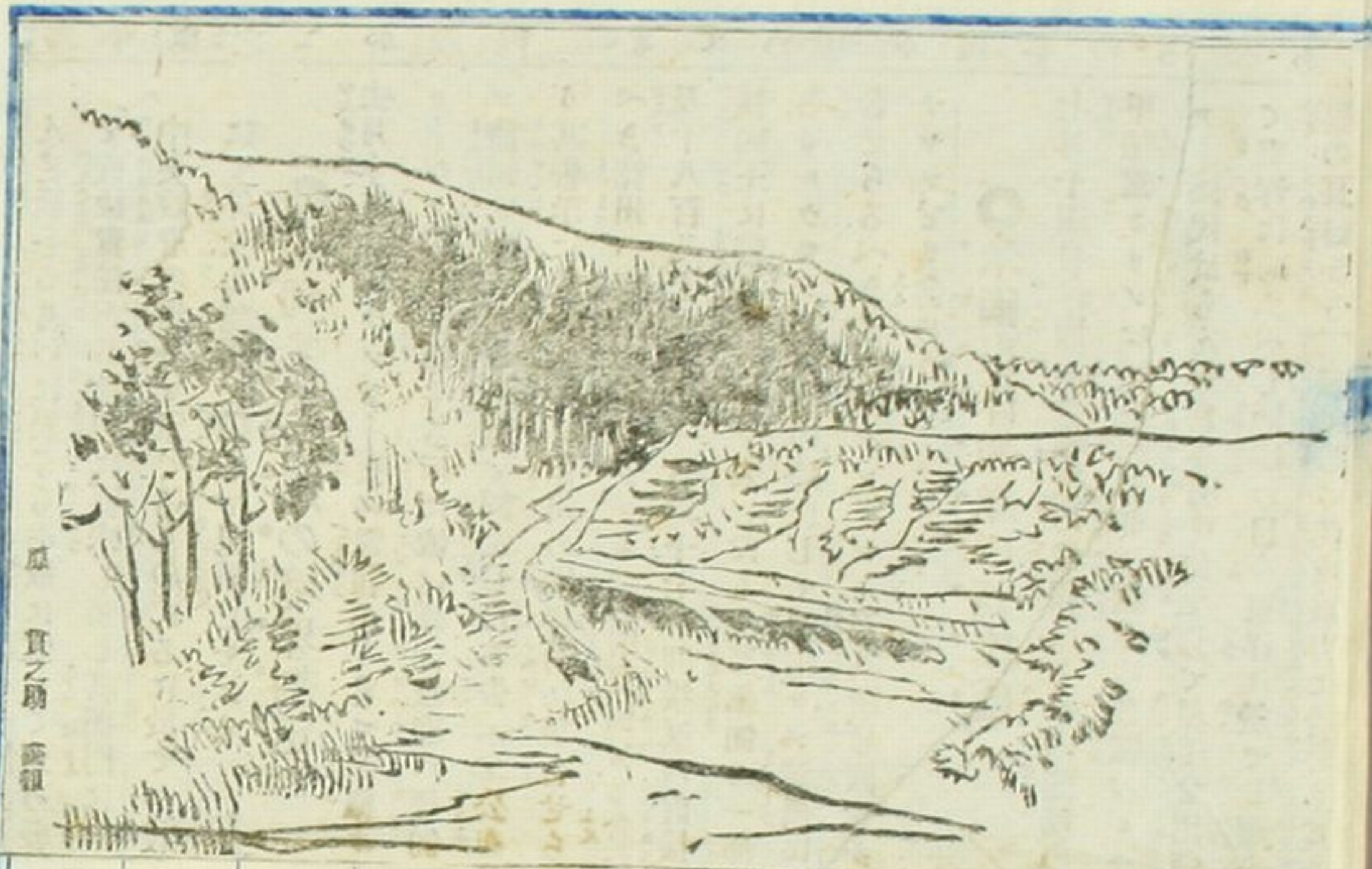












さいしん... 氏...  
 天文の比細成武...  
 ありて昔... 八幡大菩薩...  
 書を著ける... 北...  
 堅を... 鏡を...  
 以て... 人... 情...  
 系... 軍... 地...  
 ... 此...  
 ... 此...

東林...  
 山...

... 上... 於... 日... 京... 洛...  
 ... 田... 中... 野...  
 ... 河... 之... 名...  
 ... 陸... 防... 衛... 地...  
 ... 要... 所... 也...  
 ... 此... 地... 要... 塞...  
 ... 後... 代...  
 ... 寛... 政... 四... 年...  
 ... 事... 宜...  
 ... 達... 七... 百...















○鈴舎の書齋及び草稿

本居先生の事、一々感心することばかりだが、今回その書齋及び草稿類を見て、益々仰慕はれるのである。又仰慕はれると共に、今の學者の小言ばかり多くて實効の擧げぬのが、恥かしくてたまらぬ。先づその書齋といふのは、僅に四疊半である。それも天井低く、窓小さく、三尺床に小さな押入があるのみで、少し手でもさし伸ばさうものなら、こゝにもかしこにも障るやうな壁障で、まかも中二階で、その下の臺所について、その梯子など幅二尺足らず、引出しつたになつて居るのである。丁度自分の百年祭にいつたから、その當日の床の正面に、先生の自筆である「縣居大人之靈位」と書いてある掛ものがか、けて、その前に、佩刀二振、鈴舎衣（先生の自ら考案して作られた着物で、羽織の博く太いやうなもの）紀州侯より頂かれた衣服が並べてあつた。その脇の柱に、鈴舎の名のあつた三十六の鈴が懸けてあつた。今の人が見て先づ驚くのは、どうしてこんな狭い暗いやうな處で、あんな大著述が出来たのだらう

○鈴舎の書齋及び草稿

かど云ふ事である。又衛生論からでもいつたら、あまり上等といはれないやうだ。下宿屋が狭くて勉強が出来ぬ、天井が低くて衛生にあるいなどいつて、たゞ窓のつけ工合や、寒腰計のにらみくらしして論ずるやうな事は、かき増長して居るやうな世界で、とてもこんな處に居られたわけでない。先生の七十以上まで生きて居られて、その室で大著業を遂げられたのを、いかに準備ばかり整つても、眞に學問氣の元いものな事と見える。又その草稿のとき、誰も知てる通り、故下ま

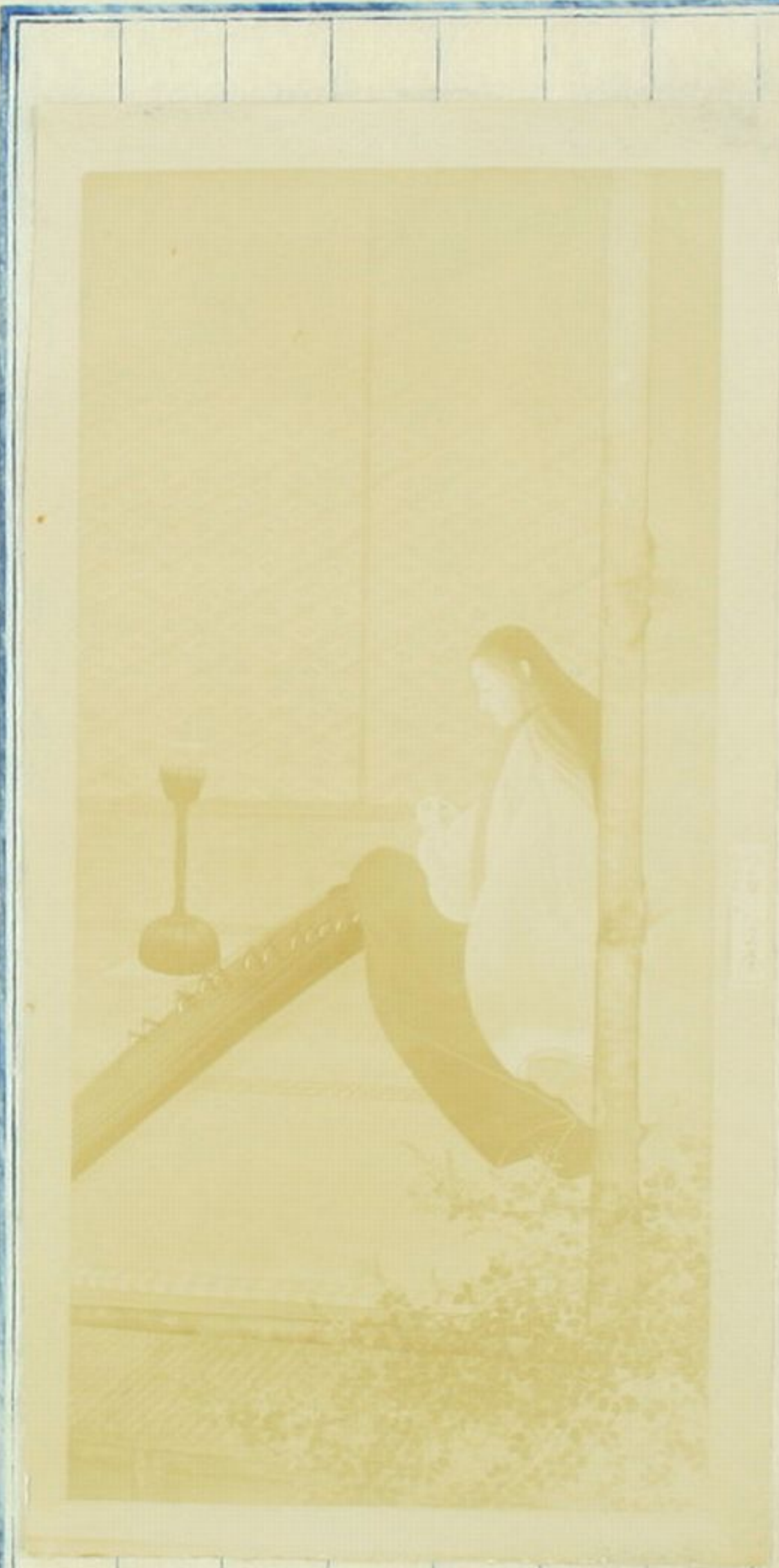
で自筆が多いので、古事記傳など、三度もか、れてある。まかも第一稿ともいふ古事記に書入れたものであるが、一字も漏れず、筆の跡が、筆畫の崩れて居る字はない、よめな字の元、漢文に、かへり墨をさへつけてある。文字に、假字をよつてある。實にその氣根といふ、恐るべきもので、墨つぎまで一定してゐる。これ、古事記傳ばかりでない。その他の草稿類も同じ事である。又日記のとき、中古の記録文体（東鑑のとき、体）で、チャインと削つて居る。死なれるすぐ前







女工の金船



女工の金船

名力

出為

目  
力











へきも月々追引するも決意しそまも初志を  
翻すことなきし本月十日舟を車止と名  
付門を渡り或る時接し或る時接し故を以て  
龜と本山の由縁を説き悔しは昔昔の拙作  
の石を吹らすも又研究の能くを以て  
考ふるも拙作しし事法然のししこのまに  
附し初めの時を求む本山も五分も  
真の地くさる事法然のしし海を以て  
如くも今を以てし初志を以てて今も  
へきも自ら追引するも決意しそまも初志を  
翻すことなきし本月十日舟を車止と名  
付門を渡り或る時接し或る時接し故を以て  
龜と本山の由縁を説き悔しは昔昔の拙作  
の石を吹らすも又研究の能くを以て  
考ふるも拙作しし事法然のししこのまに  
附し初めの時を求む本山も五分も  
真の地くさる事法然のしし海を以て  
如くも今を以てし初志を以てて今も  
へきも自ら追引するも決意しそまも初志を  
翻すことなきし本月十日舟を車止と名  
付門を渡り或る時接し或る時接し故を以て  
龜と本山の由縁を説き悔しは昔昔の拙作  
の石を吹らすも又研究の能くを以て  
考ふるも拙作しし事法然のししこのまに  
附し初めの時を求む本山も五分も  
真の地くさる事法然のしし海を以て  
如くも今を以てし初志を以てて今も

法然

を以て追引するも決意しそまも初志を  
翻すことなきし本月十日舟を車止と名  
付門を渡り或る時接し或る時接し故を以て  
龜と本山の由縁を説き悔しは昔昔の拙作  
の石を吹らすも又研究の能くを以て  
考ふるも拙作しし事法然のししこのまに  
附し初めの時を求む本山も五分も  
真の地くさる事法然のしし海を以て  
如くも今を以てし初志を以てて今も  
へきも自ら追引するも決意しそまも初志を  
翻すことなきし本月十日舟を車止と名  
付門を渡り或る時接し或る時接し故を以て  
龜と本山の由縁を説き悔しは昔昔の拙作  
の石を吹らすも又研究の能くを以て  
考ふるも拙作しし事法然のししこのまに  
附し初めの時を求む本山も五分も  
真の地くさる事法然のしし海を以て  
如くも今を以てし初志を以てて今も  
へきも自ら追引するも決意しそまも初志を  
翻すことなきし本月十日舟を車止と名  
付門を渡り或る時接し或る時接し故を以て  
龜と本山の由縁を説き悔しは昔昔の拙作  
の石を吹らすも又研究の能くを以て  
考ふるも拙作しし事法然のししこのまに  
附し初めの時を求む本山も五分も  
真の地くさる事法然のしし海を以て  
如くも今を以てし初志を以てて今も



うむ海海とあるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る  
とて其の目と謂はるるをもちて其の事なるを推し置る

古代南都の學問に、自宗相承門と他宗抗對門との二部の研究  
法有之候由相傳候。又我真宗大谷派の先輩にも宗乘につき、決  
擇と融會との二門の研究法あることを辯じ、而もこの二門共  
に必要な所以を講ぜし者有之候。而して拙者近來從事致候  
ところは、前者によれば他宗抗對門とも云ふべく、後者によれ  
ば融會門とも云ふべき對外的方面の研究法に候。  
惟ふに、佛教の學風は中古以降多くは自宗相承門若くは決擇  
門とも云ふべき方面の研究法に傾き、その弊や、或は形式に流

れ、或は固陋に陷る者之ありと信じ候、依て不肖先きに内外學  
界の趨勢に就き、聊か鑑みるところありて、佛教研究の方法を  
一變せんと欲し、爾來その方針により研究の歩を進め、漸く頃  
者その研究の一端を佛教統一論第一編大綱論と題して發刊  
するの運に至り候。  
抑該著述の精神は、一に佛教の真髓を發揮し、以て佛教各派の  
理想の統一を企圖するの外無之候。而して各宗教理の根底は  
全く一なるべきが故に、佛教の真髓は斷じて真宗教理の真精  
神と撞着するものにあらず、寧ろ一致するものと確信致候。然  
るに文筆の足らざるが爲め乎、將た又著述の完結せざるが爲  
め乎、揣らずも、派内の物議を惹起し候に由り、特に 新法主臺  
下の御配慮を煩はし候事恐縮の至りに存候。然れども刻下從



事一つあるこの研究を停止するを拙者の意  
志の改ざりたるを知らざるを及ばぬゆゑ  
右研究を遂行し政を先任し拙者の信を  
除きあはれん也

昭和十四年十月二十日

文部省博士村上等精印

執綱大谷勝縁殿

此年十一月十日を以て研究を遂行するを  
知りしに先んば拙者を論じ自由を以て  
月と日とあるも怪しき事とす

○とを以てせん

此研究の大谷勝縁の著書に「研究を遂行するを  
知りしに先んば拙者を論じ自由を以て  
月と日とあるも怪しき事とす」

一 此研究の遂行するに先んば拙者を論じ自由を以て  
月と日とあるも怪しき事とす

一 此研究の遂行するに先んば拙者を論じ自由を以て  
月と日とあるも怪しき事とす











銘々が自家の名称は若干の筆を添くこと  
ボーイの支分多ボーイと名称の書きひとしき  
白紙の名称を心色喰紅二枚丈ヲワックスフオー  
カハブリジと一枚の、紙一紙くしと二個の  
五五二一と記名の名称を入れたヲワックスと  
カハブリを書ける名称と書る他の白紙名称  
を入おるある日二筆のゆきと名称を二枚出す  
まじり記名名称を一枚出すは白紙の名称も  
又一枚出すは紙一と紙二と紙三の白紙はカハ  
カハハワタと書る白紙の名称と同様の出す  
名<sup>補</sup>記名の人の友人あるうらことなること

本家  
家書

書き約しことば多数の略者を添くこと  
双方一人づきの筆を添くこと  
筆を添くこと

一 ラマ<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>の秘佛<sup>う</sup>ある<sup>う</sup>は、本家  
市<sup>の</sup>えに<sup>支</sup>分<sup>の</sup>お<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>佛<sup>の</sup>内<sup>の</sup>男<sup>の</sup>女<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>持<sup>の</sup>佛<sup>の</sup>像<sup>の</sup>い<sup>の</sup>く<sup>の</sup>も<sup>の</sup>あ<sup>る</sup>う<sup>ら</sup>は<sup>の</sup>紙<sup>の</sup>  
中<sup>の</sup>一<sup>の</sup>奇<sup>の</sup>と<sup>の</sup>一<sup>の</sup>男<sup>の</sup>と<sup>の</sup>女<sup>の</sup>と<sup>の</sup>一<sup>の</sup>つ  
あ<sup>る</sup>は<sup>の</sup>一<sup>の</sup>男<sup>の</sup>子<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>と<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>と<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>  
あ<sup>る</sup>は<sup>の</sup>一<sup>の</sup>男<sup>の</sup>子<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>と<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>と<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>  
く<sup>の</sup>一<sup>の</sup>男<sup>の</sup>子<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>と<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>と<sup>の</sup>陽<sup>の</sup>抄<sup>の</sup>  
一 兵士の入字陰陽の陰し其んふまを添くこと







新製鐵所の開業式  
馬關門司小倉等に宿泊せる東京大阪其他各地の  
來賓の早朝より夫れく大森驛に下車し停車場よ  
り製鐵所に至る十數町の道路ハ俄にシルクハット  
フロックコートを以て埋められ道の左右の彩旗球  
燈線門と相映して此の片山舎に異様の光を添へた  
り東京よりワザく御來臨の伏見宮殿下亦九時三  
十分ハ門司を發して同所へ成らせ給ふ所員並に來  
客一同の謹んで之を迎へ奉り斯くて式ハ十時三十  
分より製鐵所内東北隅の荷揚場に開かれたり招に  
應じて來り會するもの山本海軍大臣、平田農商務  
大臣、黒田侯、榎本子、貴衆兩院議員、陸海軍人  
各地新聞記者等凡そ八百餘名、中天に轟く烟花と  
海軍軍樂隊の奏樂とを相圖に一同着席、親王殿下

○若林あゝ成て

その自ら臨み視るる志を人のえし記を以て自ら  
の代わらまふ

●製鐵所開業式

馬關門司小倉等に宿泊せる東京大阪其他各地の  
來賓の早朝より夫れく大森驛に下車し停車場よ  
り製鐵所に至る十數町の道路ハ俄にシルクハット  
フロックコートを以て埋められ道の左右の彩旗球  
燈線門と相映して此の片山舎に異様の光を添へた  
り東京よりワザく御來臨の伏見宮殿下亦九時三

十分ハ門司を發して同所へ成らせ給ふ所員並に來  
客一同の謹んで之を迎へ奉り斯くて式ハ十時三十  
分より製鐵所内東北隅の荷揚場に開かれたり招に  
應じて來り會するもの山本海軍大臣、平田農商務  
大臣、黒田侯、榎本子、貴衆兩院議員、陸海軍人  
各地新聞記者等凡そ八百餘名、中天に轟く烟花と  
海軍軍樂隊の奏樂とを相圖に一同着席、親王殿下

若林あゝ成

にハ既電の旨を賜ひ平田農相式辭を述べ次で和  
田長官の報告演説黒田侯金子男得能福岡縣知事等  
の祝詞形の如く夫より宴會に移りて後一同所員の  
案内にて工場を參觀す

いふまでもなく製鐵所の日本第一の大工場なり日  
本唯一の製鐵所なり其の規模の宏大にして作業の  
珍らしき専門家にあらざるものも亦非常の趣味を  
惹くに足る今和田長官の報告演説に依りて聊か其  
の事業の一般を記さん製鐵所が始めて議會の協  
賛を経て成立したるハ明治二十九年四月に在り爾  
來一年有半の主として諸工場の設計に従ひ海外の  
事情等をも精査する所あり其の結果到底大規模の  
計畫を以て廉價に多量の品物を製出するにあらざ  
れば存立の難きを認め之が爲め最初の計畫四百餘  
萬圓なりしを改めて今日の如く創業費用千四百七  
十萬圓運轉資本四百五十萬圓の巨額に増加したる  
ものなりといふ扱て製鐵所の設計の成ると同時に  
直に建築に従事し昨年末より一部分づゝの竣功を  
見、終に本年二月を以て製鐵を五月に製鐵を始め  
次で製品工場の一部も亦竣成し今や此等の竣成し  
たる部分に付てハ續て夫々作業をなしつつあり尙

ハ成功の分の十の三四に過ぎざる事となりたり既  
成の部分にのみ就て勘定するも勞力を使用したる  
と約百五十萬、煉瓦二千八百萬箇、耐火煉瓦四百  
萬箇、セメント五萬二千樽に及べりといふ其の事  
業の大なる以て思ふべきなり  
製鐵所の事業ハ第一に鑛石より鐵鐵を製造し第二  
に此の鐵鐵よりハスメル鋼及びシイメン鋼を製し  
第三に此の鋼材を以て船舶鐵道工業軍事等の用材  
を製するに在り今や此等の事業既に其の緒に就き  
開業式參列の賓客の序を逐ふて作業の景況を見る  
を得たり萬事の原料たる鑛石ハ内にして釜石赤谷  
作州等に産し外にして清國大治朝鮮殷等より充  
分の供給を得るの途を講じ年々の所要二十四萬噸  
の多きに及ぶも決して其の缺乏を訴ふるの虞なし  
といふ此等の鑛石ハ先づ構内船橋より鐵道に依り  
て置場に貯藏せられ夫れより捲上機に依りて鑛鐵  
爐の中に石灰コークス等と共に投入すれば不盡の  
火ハ之を燒きて灼熱の流動體たらしめ所謂鐵渣と  
なりて流出す高さ百尺以上周圍數十尺の巨爐瓦然  
として天に聳え其の下部より流出する幾噸の鐵渣  
火花を散らして鑛形の中に躍り込む様壯絶快絶殆































舟に暮して其光りよとんまのめあ、すき修の縄は持  
り七つんを、さばきあづうきことを、やま〜んを  
す、鶴<sup>ひづる</sup>鶴<sup>ひづる</sup>のたもを、みぬ信<sup>のぶ</sup>のた、走<sup>は</sup>つちぢぬを  
抱<sup>か</sup>き、ままもぢぬを、又抱<sup>か</sup>く、あづう〜  
ちぢぬを、ひきまはひけさば〜んと〜ん  
とあ〜ぬのひきまあ〜しとあ〜

誰事よふちし狂歌をみ〜〜〜を箇中の酒  
とあ〜ん、さる〜ん〜んと〜ん見ゆん



A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the left edge of the page.

東洋製

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the right edge of the page.



以下全て

白紙



命  
子  
命  
子  
命  
子  
命  
子

十  
公  
起  
也

子  
命  
子  
命  
子  
命  
子